政大日本研究【第十六號】
2019 年 1 月、頁 211～240
10.30379/CJJS.201901_(16).0009

以日語為上層之宜蘭克里奧爾的數詞

簡　月真*

中文摘要

本文探討以日語為上層（詞彙供給）語言的「宜蘭克里奧爾」之數詞系統，並解析其語言變化之過程。根據東岳村田野調查所得語料進行分析之結果如下。首先，宜蘭克里奧爾擁有源自日語的「本數詞」及源自泰雅語的本數詞；1～4 傾向使用源自泰雅語的本數詞，而 5 以上則使用源自日語的本數詞。其次，宜蘭克里奧爾中可見*-ri*、*-mey*、*-hiki*、*-to*、*-day*、*-syo*、*-cu*、*-hong*、*-may*、*-syacu*、*-ko* 等源自日語的「分類詞」，但其語意及用法與日語相異。表名詞之數量時，1～4 亦傾向使用源自泰雅語的本數詞，而 5 以上則使用「源自日語的本數詞+分類詞」或僅用源自日語的本數詞。再者，根據世代間變異，本文指出：①受訪者年紀愈輕，分類詞*-hiki* 與*-hong* 的變體愈少，②受訪者年紀愈輕，分類詞系統愈趨簡化；分類詞*-ko* 之語意範圍自「小型物品」擴張至「機械」，甚至於「動物」「扁平物品」。

關鍵詞：日語系克里奧爾　泰雅語　數詞　分類詞　變異

* 國立東華大學民族語言與傳播學系副教授

The Numeral System of Yilan Creole

CHIEN, Yuehchen*

Abstract

This paper describes the numeral system of a Japanese-lexifier creole, Yilan Creole. Data were collected from three generations of consultants in Tungyueh Village, Taiwan. The analysis indicates, first, that Yilan Creole uses cardinal numerals from both Atayal (the substrate) and Japanese, with Atayal numerals restricted to numbers of four or less. Second, Yilan Creole uses Japanese-derived numeral classifiers including *-ri*, *-mey*, *-hiki*, *-to*, *-day*, *-syo*, *-cu*, *-hong*, *-may*, *-syacu*, and *-ko* (and variants). From one to four, Atayal-derived numerals modify nouns directly. For larger numbers, either a Japanese-derived numeral, or a number phrase consisting of a Japanese-derived numeral and classifier, modifies the noun. Third, there is generational variation: younger speakers use fewer classifiers and fewer variants of those classifiers. They also show semantic extension of the small object classifier *-ko*, using it much more widely than do older speakers (e.g., for machines, animals and flat objects).

Keywords: Japanese-lexifier creole, Atayal, numeral, classifier, variation

* Associate Professor, Department of Indigenous Languages and Communication, National Dong Hwa University.

日本語を上層とする宜蘭クレオールの数詞

簡　月真*

要旨

本稿は、日本語を上層（語彙供給）言語とする宜蘭クレオールの数詞について記述を行い、その変化のプロセスを明らかにするものである。東岳村で得られたデータをもとに考察を行った結果、次のようなことが明らかになった。まず、宜蘭クレオールには日本語由来の本数詞とアタヤル語由来の本数詞が併存し、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には日本語由来の本数詞が用いられる傾向が見られる。次に、日本語由来の助数詞*-ri*・*-mey*・*-hiki*・*-to*・*-day*・*-syo*・*-cu*・*-hong*・*-may*・*-syacu*・*-ko* などが用いられるが、その意味用法は日本語と異なるものである。名詞の数量を数える際に、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞+助数詞」あるいは日本語由来の本数詞のみが使用される傾向がある。そして、世代間変異から、①若いほど、助数詞*-hiki* と*-hong* の変異形が減少すること、②若いほど、助数詞の体系が単純化しており、*-ko* の意味範囲が「小物」から「機械」「動物」「平たい物」まで拡大していることが明らかになった。

キーワード：日本語系クレオール　アタヤル語　数詞　助数詞　変異

* 国立東華大学民族言語与伝播学科准教授

日本語を上層とする宜蘭クレオールの数詞

簡　月真

1. はじめに

本稿では、宜蘭クレオールの言語構造の記述の一環として、数詞について論じる。宜蘭クレオールは、日本の植民地統治（1895～1945年）によって台湾に渡った日本語が、アタヤル語（=タイヤル語）・セデック語と接触したことによって形成された新しい言語である。日本語を上層（語彙供給）言語、アタヤル語を基層言語、閩南語と華語を傍層言語[1]とするこのクレオールは、台湾東部の宜蘭県南澳郷東岳村・金洋村[2]・澳花村と大同郷寒渓村の四つの村に住むアタヤル人とセデック人によって使用されている[3]。ただし、若い世代では話せない人が増え、華語へのシフトが起こりつつある。

宜蘭クレオールの形成にかかわる歴史的・社会的背景やクレオールとしての認定に関しては、真田・簡（2007・2008）、土田（2008）、Chien & Sanada（2010）などで論じられている。また、真田・簡（2007・2008）、安部ほか（2008）、簡・真田（2010・2011）、真田（2015）、Chien（2015・2016）、簡（2018a・2018b）などによって宜蘭クレオールの言語的構造が明らかにされつつある。

---

[1] 「上層言語（superstrate language）」や「基層言語（substrate language）」は歴史言語学の用語から借用されたものであるが、クレオール言語学（creolistics）では異なる意味で使われている。上層言語は社会的・経済的に優位に立つグループの言語で、植民地の場合は統治者の言語を指す。それに対して、基層言語は社会的・経済的に劣勢に立つグループの言語で、植民地の場合は被統治者の言語、プランテーションなどでの場合は労働者の言語を指す。「傍層言語（adstrate language）」はピジン・クレオールの形成に影響を与えない、もしくは、ピジン・クレオール形成後に接触する言語である。また、上層言語がピジン・クレオールに語彙を大量に提供する言語であるという側面に焦点をあてる場合、「語彙供給言語（lexifier language）」という用語が用いられる（Kouwenberg and Singler 2008）。

[2] 金洋村には博愛路と金洋路があるが、宜蘭クレオールが使用されるのは博愛路のみである。金洋路では伝統的なアタヤル語が話されている。

[3] 正確な話者数はわからないが、2018年12月現在、4村の人口は合計3,285人である。その内訳は東岳村569人、金洋村626人、澳花村964人、寒渓村1,126人である（http://hrs.e-land.gov.tw/）。

しかしながら、日常会話において使用頻度が高い数詞の使用については体系的な分析は行われておらず、その実態はわかっていない。日本語もアタヤル語も複数を表すために名詞が形を変えることはないが、日本語は助数詞を豊富に持つのに対して、アタヤル語は助数詞が少ないとされている。これまで、世界のピジン・クレオールを中心とした接触言語の中で、助数詞の使用が報告されたのは、アジア地域のAmbon Malay、Chinese Pidgin English、Sri Lanka Portuguese、そして北アメリカのGullahの4言語のみである（Maurer et al. 2013）が、宜蘭クレオールには助数詞の使用が確認された。したがって、それがどのように用いられているのかは、興味深い課題である。

本稿では、宜蘭クレオールの言語構造の記述の一環として「数」の表し方について、数量の表現を取り上げる。具体的には、本数詞と助数詞について論じる。そのうえで、世代間変異から変化のプロセスを明らかにしていきたい。

以下ではまず第2節で調査の概要を説明する。次に、調査で得られたデータに基づいて、第3節では宜蘭クレオールの本数詞、第4節では助数詞について分析を行う。その上で、第5節では変異理論の考え方を援用して、世代間変異から宜蘭クレオールの助数詞の変容プロセスを論じることにする。最後の第6節はまとめと今後の課題である。

2. 調査概要

本稿で用いるデータは、東岳村で主として 2016 年 8 月から 2018 年 8 月にかけて、断続的に行ったフィールドワークで得られたものである。データ収集は面接調査で「数」に関する形式と用法を引きだす方法で実施した。インフォーマントは 1934～1974 年生まれの、東岳村生え抜きの宜蘭クレオール話者で、計 15 人である[4]（表 1）。

[4] 本稿は少人数（15人）の話者を対象とする質的研究である。宜蘭クレオールの数詞が記述されていない現段階では、質的研究で少人数の話者に対して時間をかけて調査し、その使われる数詞の体系を深く掘り下げる必要がある。本稿の結果を踏まえて、今後はより多くの話者を対象にする量的研究の実施も可能になろう。

表 1　インフォーマント一覧

インフォーマント略号	性別	生年	移民世代
KFS	女性	1934	二世
HFS	女性	1939	二世
SFT	女性	1947	三世
AMT	男性	1951	三世
NFT	女性	1955	三世
MMT	男性	1955	三世
IMT	男性	1957	三世
UFT	女性	1958	三世
CMT	男性	1959	三世
OMT	男性	1964	三世
GMT	男性	1964	三世
EFT	女性	1964	三世
LFT	女性	1966	三世
BFF	女性	1968	四世
YFF	女性	1974	四世

※インフォーマント略号は名前・性別・移民世代の順に示した。女性はF、男性はM、二世はSecondのS、三世はThirdのT、四世はFourthのFで表す。

東岳村の住民が南澳の山奥から現在地に移住させられて共同生活を始めたのは 1913 年からのことである（臺灣總督府警務局 1938）。最初の移住者世代を移民一世とすれば、インフォーマント KFS と HFS は二世にあたり、SFT・AMT・NFT・MMT・IMT・UFT・CMT・OMT・GMT・EFT・LFT は三世、BFF と YFF は四世である。

インフォーマントは全員宜蘭クレオールを第一言語としており、日常的に使用している（特に二世と三世が宜蘭クレオールを多用している）。ただし、東岳村でも 1980 年代以降に生まれた人の多くは宜蘭クレオールが話せなくなっており、華語へのシフトが進行している（東岳村での言語使用については Chien & Sanada 2010、簡 2018a を参照されたい）。

3. 本数詞

「数詞」はしばしば基数詞（cardinal number）と序数詞（ordinal number）に大別される。前者は例えば英語の *one*, *two*, *three* や日本語の「一・二冊・三回」などのように個数・数量・度数を表すもの

で、後者は例えば英語の *first, second, third* や日本語の「第一・二人目・三等」のように順序・位置づけを表すものである（田中ほか編 1988、佐藤編 1992、日本語教育学会編 2005 など）。日本語の場合、基数詞も序数詞も多く「数の概念を表す語（本数詞）＋数えられる対象の種類を表す語（助数詞）」の形で用いられる[5]（日本語教育学会編 2005）。本節では、数の概念を表す語、すなわち「本数詞」を扱うことにする。なお、一般的に「本数詞」のことを「数詞」で表すことが多いが、本稿では日本語教育学会編（2005）に従い、数の概念を表す「1」「2」「3」などの語のことを「本数詞」と称して、前述の「数詞」と区別する。

日本語とアタヤル語の本数詞は表 2 に示すとおりである。

表 2　日本語とアタヤル語の本数詞

本数詞	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日本語	ici	ni	san	si/yon	go	roku	sici/nana	haci	ku/kyū	zyū	zyūici	zyūni
アタヤル語	utux	sa'ing	tugan	payat	magan	tiyu	pitu	spat	mesu	mpuw	mpuw utux	mpuw sa'ing

※表におけるアタヤル語は、宜蘭県南澳郷武塔村で話される、アタヤル語の宜蘭ツオレ方言（「宜蘭ツオレアタヤル語」）である。江ほか編著（2009）及び江氏に対する面接調査の結果を示す。なお、*tugan* は *tugal*、*magan* は *magal* とも表記される。

表 2 に示した日本語とアタヤル語の本数詞を取り込んで、宜蘭クレオールでは、日本語を起源とする本数詞（*ici*, *ni*, *san*[6], *si/yon*, *go*, *roku*, *sici/nana*, *haci*, *ku/kyu*[7], *zyu*, *zyuici*, *zyuni* など）及びアタヤル語を起源とする本数詞（*utux*, *sa'ing*, *tugan*, *payat*, *magan*, *tiyu*, *pitu*, *spat*, *mesu*, *mpuw*, *mpuw utux*, *mpuw sa'ing* など）が使用されている。日本語の本数詞では、4 は *si* と *yon*、7 は *sici* と *nana*、9 は *ku* と *kyū* と

[5] 助数詞は接尾辞（～つ、～冊、～目など）がほとんどであるが、序数詞特有の「第～」は唯一接頭辞的な助数詞である（日本語教育学会編 2005）。

[6] 本数詞の3には*san*と*sang*、4には*yon*と*yong*の発音が観察されるが、本稿では3・4をそれぞれ*san*・*yon*で示す。*n*と*ng*の使用に関する考察は別稿に譲る。

[7] 宜蘭クレオールでは、日本語由来の語彙について長音が短音化し、促音が発音されない傾向がある。ただし、二世と三世の中には、例えば「10」を*zyū*のように長音で、また「10匹」を*zippiki*のように促音を入れて発音する人がいるが、本稿では*zyu*、*zipiki*で示す。宜蘭クレオールにおける特殊音素の変化については別稿で論じる。

いう変異形がある。宜蘭クレオールの日本語由来の本数詞でも、4 は *si* と *yon*、7 は *sici* と *nana*、9 は *ku* と *kyu* という変異形がある。ただし、*yon* は助数詞と結合する場合にだけ現れ、本数詞単独で使用される場合、7 は *sici* と *nana* の両方が使えるが、4 は *si* のみ（*yon* はない）、9 は *ku* のみ（*kyu* はない）である。単独で使用される本数詞（1～12）は次のようなものである。

なお、例文[8]にある/は併用を意味し、例文の後に使用者（インフォーマント略号）を［ ］で示す。また、宜蘭クレオールの単語と例文の意味を〈 〉内に記す。

(1) utux[9]/ici, sa’ing/ni, tugan/san, payat/si, magan/go, tiyu/roku, pitu/sici/nana, spat/haci, mesu/ku, mpuw/zyu, mpuw utux/zyuici, mpuw sa’ing/zyuni ［KFS, HFS, SFT］

(2) utux/ici, sa’ing/ni, tugan/san, payat/si, go, roku, sici/nana, haci, ku, zyu, zyuici, zyuni
［AMT, NFT, MMT, IMT, UFT, CMT, OMT, GMT, EFT, LFT, BFF, YFF］

(3) utux, sa’ing, tugan, payat, go, roku, sici/nana, haci, ku, zyu, zyuici, zyuni
［AMT, NFT, MMT, IMT, UFT, CMT, OMT, GMT, EFT, LFT, BFF, YFF］

二世の KFS・HFS と年配の三世 SFT は（1）に示すように日本語由来の本数詞とアタヤル語由来の本数詞を併用する。5 以上にアタヤル語由来の本数詞を用いるのはこの三人だけで、ほかのインフォーマントは、（2）に示すように、1～4 には日本語由来の本数詞とアタヤル語由来の本数詞を併用するが、5 以上には日本語由来の本数詞だけを使う。また、これらのインフォーマントでは、（3）に示す

[8] 宜蘭クレオールの音韻体系は、周辺の村で話される伝統的なアタヤル語を基本としているため、宜蘭クレオールの表記に当たっては、アタヤル語表記法に従う（「’」は声門閉鎖音/ʔ/を表す）。アタヤル語表記法は、台湾行政院原住民族委員会および教育部が2005年12月に公布したものである。

[9] utux は utox と発音されることがある。

ように、1～4 はアタヤル語由来の本数詞のほうがよく使われる。1～4 は小さい数でよく使われる本数詞のため、基層言語が残りやすいのではないかと考えられる。

4. 助数詞

ある名詞の数量を表す場合には、その名詞の属する種類・範疇・単位に関係する要素（形態素・語）を付加することがある（亀井ほか編 1996）。いわゆる助数詞（numerative, classifier）である。前節で述べたように、日本語の基数詞も序数詞も、多くの場合、助数詞を付加して用いられる（日本語教育学会編 2005）が、本節では基数詞だけを考察の対象とする。

水口（2004）では、日本語の助数詞を意味的な観点から次の 3 種類に分類している。なお、水口（前掲）では「類別詞」という用語を使っているが、本稿では「助数詞」とする。

（a） 個別助数詞:ある個体の最小単位を数える時に用いる助数詞（人、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など）

（b） 集合助数詞:個体がいくつか集まって作っているグループを単位として数える時の助数詞（対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など）

（c） 計量助数詞:個体の最小単位がはっきりせず、量を測ることで個別化する助数詞（杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、トン、など）

日本語はこうした助数詞を豊富に持つ言語である。それに対して、アタヤル語は基本的に（b）集合助数詞と（c）計量助数詞は持つが、（a）個別助数詞は持たない言語である[10]。

[10] アタヤル語の助数詞に関する詳しい研究は管見の限りないようであるが、Rau（1992:118）では、“There is a small set of noun classifiers which occur before common nouns to serve as counters, as illustrated in the following example: *qutux takil ŋahi’* ‘one basketful of sweet potatoes’”とし、アタヤル語（スコレック方言）にわずかな助数詞が存在するとしている。*qutux takil ŋahi’*は「1 籠 薩摩芋」で〈一籠（いっぱい）の薩摩芋〉という意味であるが、この「籠」は山口（2004）

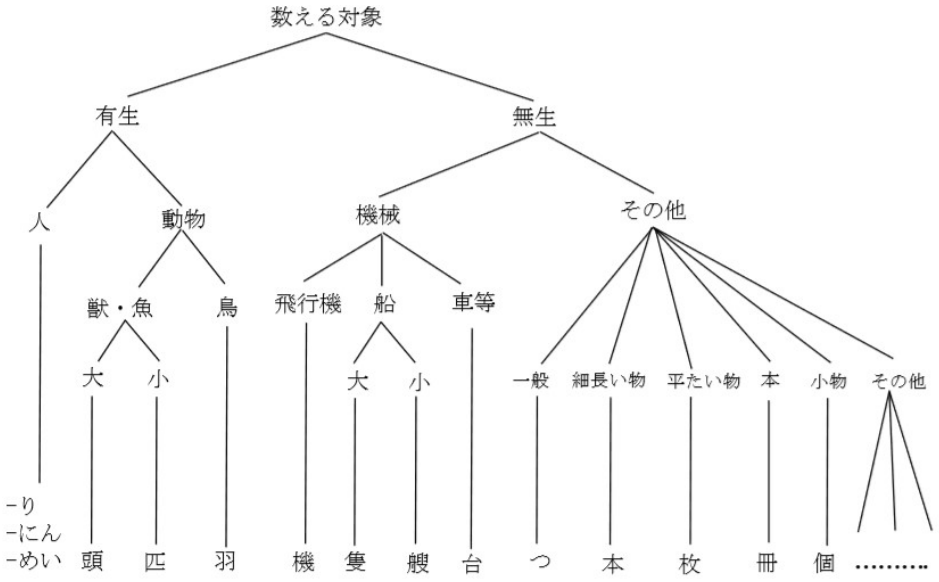
宜蘭クレオールでは、どのような助数詞がどのように用いられているのだろうか。本稿では、その使用がもっとも多く観察される(a)個別助数詞を取り上げることにする。宜蘭クレオールには日本語由来の助数詞が多く取り入れられているため、以下ではまず日本語の助数詞を概観してから、宜蘭クレオールにおける使用を考察していく。

4.1. 日本語の助数詞

日本語は助数詞の数が多く、その用法も複雑である。数える対象の種類によって使い分けられる日本語の助数詞の一部を図 1 に示す。日本語の助数詞は数が多く、すべて収めることは困難であるが、図 1 から、日本語の助数詞の大まかな枠を読み取ることができよう。

日本語の助数詞はまず数える対象が有生物か無生物かによって大別できる。有生物の場合はさらに「人」と「動物」に分かれるが、「動物」は「獣・魚」「鳥」と下位区分がなされ、「頭」「匹」「羽」が使い分けられる（獣の場合、大きさによって「頭」と「匹」が使い分けられる)。無生物の場合は「機械」と「その他」に分かれるが、「機械」は「飛行機」「船」「車等」と下位区分がなされ、「機」「隻」「艘」「台」が使い分けられる。「その他」では対象の形状などによって「つ」「本」「枚」「冊」「個」といった多様な助数詞が用いられる。

の(c)計量助数詞に当たる助数詞と考えられる。また、筆者による調査の結果、「宜蘭ツオレアタヤル語」（武塔村）では *utux knlgan kating*「1 群れ 牛」〈一群れの牛〉、*utux lisuw biyak*「1 巣 豚」〈一小屋の豚〉、*utux pnbuyan geloh*「1 房 バナナ」〈一房のバナナ〉など、山口（前掲）の（b）集合助数詞に当たる助数詞が用いられることがわかった。しかし、個別助数詞はなく、Rau（1992:131）にあるように、「一人の人」のことを *qutux squliq*（「1 人」)、「二つのコップ」のことを *sazing yonomi*（「2 湯飲み」）のように本数詞だけで表す。アタヤル語には集合助数詞と計量助数詞はあるが、個別助数詞に当たる助数詞はないと言えそうである。その詳しい記述と実態の究明は今後の課題である。



※Iwasaki（2013）より引用。ただし、日本語訳は筆者による。

図 1　日本語の助数詞

4.2. 宜蘭クレオールの助数詞

宜蘭クレオールでは名詞の数量を表すのに、日本語由来の本数詞に助数詞を付加する言い方（日本語と同じ）と助数詞を使わない言い方（アタヤル語と同じ）がある[11]。助数詞を使う場合、「本数詞＋助数詞」の形で用いられるのは日本語と同様である。助数詞を使わない場合、アタヤル語由来の本数詞が用いられることもあれば、日本語由来の本数詞が用いられることもある。

以下では、前節の日本語の助数詞の分類（Iwasaki 2013）に従って、「人」「動物」「機械」「その他」の順に、宜蘭クレオールの助数詞について見ていく。

[11]宜蘭クレオールでは、数詞は名詞としての用法と副詞的に使われる用法がある。名詞としての用法では、例えば「1 匹の猪」の場合、①*ipiki no biyak*、②*ipiki biyak*、③*utux biyak* のような言い方がある。①は日本語の表現の仕方と同じであるが、②③は異なる。③はアタヤル語の表現の仕方と同じく「本数詞＋名詞」という構造を用いて、助数詞が使われないものである。②はその中間的な表現である（*no* の省略はアタヤル語もしくは華語の影響の可能性がある）。副詞的用法では、例えば、「猪は何匹いる？」と問われて、「1 匹（いる）」と答える場合、*utux/ipiki*（o*ru*）と言い、名詞は付けない。助数詞によっては、使用パターンに違いが存在するものの、このような使用の傾向は「人」「動物」「機械」など他のものを数える場合にも見られる。

4.2.1.「人」の場合

1 人～10 人の人数は次のように表される[12]。

(4) utux/hitori, sa'ing/hutari, tugan/sanmey, payat/yonmey, magan /gomey, tiyu/rokumey, pitu/nanamey, spat/hacimey, mesu/kyumey, mpuw/zyumey ［KFS, HFS, SFT］

(5) utux/hitori/icimey, sa'ing/hutari/nimey, tugan/sanmey, payat/ yonmey, gomey, rokumey, nanamey, hacimey, kyumey, zyumey ［AMT, NFT］

(6) utux/icimey, sa'ing/nimey, tugan/sanmey, payat/yonmey, gomey, rokumey, nanamey, hacimey, kyumey, zyumey ［MMT, IMT, UFT, CMT, OMT, GMT, EFT, LFT, BFF, YFF］

(7) utux, sa'ing, tugan, payat, gomey, rokumey, nanamey, hacimey, kyumey, zyumey ［全員］

二世の KFS・HFS と年配の三世 SFT は、(4) に示すようにアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞」の両方を用いる。ほかのインフォーマントは、(5) (6) のように 1 人～4 人はアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞」とを併用するが、5 人以上では「日本語由来の本数詞＋助数詞」のみである。ただし、二世の KFS・HFS と年配の三世 SFT も 5 人以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」をよく使うとし、すべてのインフォーマントが (7) に示すような、4 人以下にはアタヤル語由来の本数詞の方が言いやすいと内省している。これは前節で述べたような、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には日本語由来の本数詞を使うことと連動するものと考えられる。

なお、「1 人」「2 人」において、KFS・HFS・SFT・AMT・NFT は日本語の助数詞「り」由来の*-ri* を付けた *hitori* と *hutari* を使うが、

[12]宜蘭クレオールでは、〈人〉として、アタヤル語「人」由来の*cyoli/c'oli*、日本語「人間」由来の*ninggen*及び「人」由来の*hito*が使われている。

ほかのインフォーマントは日本語の助数詞「めい」由来の*-mey*を付加した*icimey*と*nimey*を使う（AMT・NFTは両方併用する）。そして、「3人」以上になると、すべてのインフォーマントが日本語の助数詞「めい」由来の*-mey*を付加した*sanmey*、*yonmey*などを使う。

日本語では、人数を表す助数詞に「り」「にん」「めい」がある。現代日本語では、「ひとり・ふたり・さんにん・よにん・ごにん・ろくにん・ななにん・はちにん・きゅうにん・じゅうにん」のように、1と2は「り」、3以上は「にん」が使われる。「いちめい・にめい・さんめい・よんめい」といった「めい」を用いる形式もあるが、文章語的である（Iwasaki 2013）。しかし、宜蘭クレオールでは、「にん」由来の助数詞は存在せず、「り」と「めい」だけが取り込まれている。なぜ「めい」が取り込まれたのか今のところまだわからないが、当時の警察や教師の言葉からの影響もあると考えられる[13]。

4.2.2.「動物」の場合

動物の数量について、例えば*biyak*〈猪〉を数える場合、1匹～10匹は次のように表現する。なお、「匹」由来の*-hiki*及びその変異形*-piki*が用いられるが、その使用には個人差が顕著なため、ここでは二世の使う形式で代表させる。変異形の使用における個人差については、第5節で述べる。

(8) utux/hitocu/ipiki, sa’ing/hutacu/nihiki, tugan/sanpiki, payat/yonpiki, magan/gohiki, tiyu/ropiki, pitu/nanahiki, spat/hapiki, mesu/kyuhiki, mpuw/zipiki ［KFS, HFS］

(9) utux/hitocu/ipiki, sa’ing/hutacu/nihiki, tugan/sanpiki, payat/yonpiki, gohiki, ropiki, nanahiki, hapiki, kyuhiki, zipiki ［SFT］

(10) utux/ipiki, sa’ing/nihiki, tugan/sanpiki, payat/yonpiki, gohiki, ropiki, nanahiki, hapiki, kyuhiki, zipiki ［AMT, NFT, MMT］

[13]「蕃童教育所」では「国語」などの授業が設けられ、警察官が警察の仕事の傍ら教育所の教師として教育に携わった（臺灣總督府警務局1944）。その警察官が威厳を保つために、文章語の「めい」を使用していたのではないかと推測される。

(11)utux/ipiki/iko, sa'ing/nihiki/niko, tugan/sanpiki/sanko, payat /yonpiki/yonko, gohiki/goko, ropiki/roko, nanahiki/nanako, hapiki/haciko, kyuhiki/kyuko, zipiki/ziko ［CMT, OMT, GMT, EFT］

(12)utux, sa'ing, tugan, payat, gohiki/goko, ropiki/roko, nanahiki/ nanako, hapiki/haciko, kyuhiki/kyuko, zipiki/ziko ［IMT］

(13)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roko, siciko/nanako, haciko, kyuko, ziko ［UFT, BFF, YFF］

二世（KFS・HFS）は（8）に示すようなアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞」の両方を使用し、「日本語由来の本数詞＋助数詞」の場合、1～2 には *ipiki*・*nihiki* のほかに *hitocu*・*hutacu* も使う。三世の SFT も似たような言い方をするが、(9) に示すように、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」のみになる。三世の AMT・NFT・MMT と CMT・OMT・GMT・EFT は *hitocu*・*hutacu* を使用しないが、(10)（11）に示すように 1～4 にはアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞」の両方を使用し、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」のみ使う。IMT と UFT・BFF・YFF は (12)（13）に示すように 1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」を使う。二世も三世も 4 匹以下にはアタヤル語由来の本数詞、5 匹以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」の方が言いやすいと内省している。動物を数える場合も、1 から 4 まではアタヤル語由来の本数詞を、5 以上の数は「日本語由来の本数詞＋助数詞」を使うという前述の本数詞や人数の場合と同様の傾向が指摘できる。

日本語由来の助数詞には*-cu* と*-hiki* と*-ko* があり、二世の KFS・HFS と三世の SFT は*-cu* と*-hiki* を、AMT・NFT・MMT は*-hiki* を、CMT・OMT・GMT・EFT と IMT は*-hiki* と*-ko* を、UFT・BFF・YFF は*-ko* を使用する。日本語では「つ」と「個」は物などの数量を表す助数詞であるが、宜蘭クレオールでは「つ」由来の*-cu* と「個」由来の*-ko* は動物の数量まで表すことができる。*-cu* と*-ko* の意味範囲が

語彙供給言語の日本語より広いのである（ただし、*-cu* は 1～2 に限る）。

なお、UFT・CMT・GMT は次の（14）のように、5 匹以上に助数詞を付けない、日本語の本数詞のみの数え方も使う。LFT は似たような使用ではあるが、(15) のように、5 だけに助数詞*-ko* を付ける。

(14)utux, sa’ing, tugan, payat, go, roku, nana, haci, kyu/ku, zyu
［UFT, CMT, GMT］

(15)utux, sa’ing, tugan, payat, goko, roku, sici/nana, haci, ku, zyu
［LFT］

宜蘭クレオールにおいて、日本語「匹」由来の助数詞*-hiki* は、上記の「猪」を数える場合のみならず、「牛」「山羊」「犬」「魚」「鶏」などの動物にも使われる。日本語のように、動物の大きさや種類によって、「頭」「匹」「羽」を使い分けることはないのである。*-hiki* の意味範囲は日本語の「匹」より広いと言える。なお、HFS と NFT は（16）に示すように*-to* を使うこともあるが、それは「牛」と「猪」の場合だけである。

(16)ito, nito, santo, yonto, goto, rokuto, sicito/nanato, hacito/hato, kyuto, zito ［HFS, NFT］

4.2.3.「機械」の場合

では、機械類の数量を数える場合はどうなるか、まず *hayya*〈車〉について見てみよう。

(17)utux/hitocu/iciday, sa’ing/hutacu/niday, tugan/sanday, payat/yonday, goday, rokuday, nanaday, haciday, kyuday, zyuday
［KFS, HFS, SFT］

(18)utux/iciday, sa’ing/niday, tugan/sanday, payat/yonday, goday,

rokuday, nanaday, haciday, kyuday, zyuday

［AMT, NFT, MMT, GMT］

(19)utux/iciday/iko, sa'ing/niday/niko, tugan/sanday/sanko, payat/yonday/yonko, goday/goko, rokuday/roko, nanaday/nanako/siciko, haciday/haciko, kyuday/kyuko, zyuday/ziko

［IMT, UFT, CMT, OMT, BFF］

(20)utux/iko, sa'ing/niko, tugan/sanko, payat/yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko ［EFT, YFF］

(21)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roku, sici/nana, haci, ku, zyu

［LFT］

LFT を除くすべてのインフォーマントは、車の数を数える際に、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞」を併用し、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」を使う。

ただし、日本語由来の助数詞においては、KFS・HFS・SFT は（17）に示すように、1～2 には*-day* と*-cu* を併用し、3 以上は*-day* を使用する。また、（18）（19）に示すように、AMT・NFT・MMT・GMT は*-day* のみ使うが、IMT・UFT・CMT・OMT・BFF は*-day* のほかに*-ko* を併用する。そして、EFT・YFF は（20）のように*-ko* のみ使う。

なお、LFT は（21）のように、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞を、5 には「日本語由来の本数詞＋日本語由来の助数詞*-ko*」を、6 以上には日本語由来の本数詞を使う。LFT は「車」だけでなく、「飛行機」や次に述べる「船」の場合も同様な言い方をする。個人の中で固まった言い方のパターンができているようである。

以上述べた *hayya*〈車〉の数え方は、*hikoki*〈飛行機〉を数える場合も同様である。ところが、*hune*〈船〉の場合は異なる様相となる。

(22)isyo, nisyo, sansyo, yonsyo, gosyo, rokusyo, nanasyo, hasyo, kyusyo, zisyo ［HFS］

(23)utux/iciday, sa'ing/niday, tugan/sanday, payat/yonday, goday,

rokuday, nanaday, haciday, kyuday, zyuday ［KFS, AMT, MMT］

(24)utux, sa’ing, tugan, payat, goko, roko, nanako/siciko, haciko, kyuko, ziko ［IMT, UFT, CMT, OMT, EFT, BFF, YFF］

(25)utux, sa’ing, tugan, payat, goko/go, roko/roku, nanako/nana, haciko/haci, kyuko/kyu, ziko/zyu ［UFT］

(26)utux, sa’ing, tugan, payat, go, roku, nana, haci, kyu, zyu ［NFT, GMT］

（22）～（26）に示すように、二世の HFS は「艘」由来の*-syo* を使うが、ほかのインフォーマントは*-syo* を使わない。二世の KFS と三世の AMT・MMT は*-day* を使うが、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞も併用する。ほかのインフォーマントは 1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には日本語由来の本数詞や助数詞*-ko* を用いる。5 以上の場合、三世の IMT・UFT・CMT・OMT・EFT と四世の BFF・YFF は日本語由来の助数詞*-ko* を使う。UFT は助数詞*-ko* を使うこともあれば、使わないこともある。NFT・GMT は日本語由来の本数詞を用い、助数詞は使用しない。なお、SFT は無回答である。

以上見てきたように、宜蘭クレオールでは、「車」と「飛行機」は基本的に*-day* で数えて*-ko* も見られるが、「船」は二世と一部の三世では*-syo* と*-day*、多くの三世と四世では*-ko* が主に用いられる。*-day* の意味範囲も*-ko* の意味範囲も語彙供給言語の日本語の「台」「個」より広いのである（日本語では「車」は「台」、「飛行機」は「機」、「船」は「隻」「艘」で数える）。

また、「車」「飛行機」「船」において、助数詞を使用せず、日本語の本数詞のみの使用も散見される。これはアタヤル語の数の表し方をモデルにしたものと考えられる。

「車」「飛行機」「船」においても、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」もしくは日本語由来の本数詞を使用する傾向が見られるのは、前述の「人」「動物」と同様に、単独使用の本数詞のパターンと連動するものと考えられ

る。

4.2.4.「その他」の場合

最後に、「その他」の場合について、「細長い物」「平たい物」「本」「小物」に分けて論じていく。

「細長い物」として「瓶」「傘」などがあるが、「瓶」の場合、「本」由来の*-hong*及びその変異形*-bong*・*-pong*が使用される。ただし、変異形の使用に個人差が顕著なため、ここでは二世の使用する形式で代表させる。変異形の使用における個人差については、第 5 節で述べる。

(27)ipong, nihong, sanbong, yonbong, gohong, ropong, nanahong, hacihong, kyuhong, zipong
［KFS, HFS, SFT, AMT, NFT, MMT, IMT, UFT, CMT, OMT, GMT, EFT, BFF］

(28)ipong, nihong, sanbong, yonbong, gohong, roku, sici/nana, haci, ku, zyu ［LFT］

(29)ipong, nihong, sanbong, yonbong, go, roku, nana, haci, ku, zyu ［YFF］

soyu〈醤油〉や *uwow*〈酒〉など「瓶」の数量を示すには、（27）のように、アタヤル語由来の本数詞は一切使用されず、もっぱら日本語由来の本数詞と助数詞*-hong*が用いられる（ただ、LFT は 6 以上、YFF は 5 以上には、助数詞を付けない）。これはこれまで見てきた数え方と大きく異なる。

同じく細長い物である *kasa*〈傘〉は、「瓶」とはまた異なる言い方になる。

(30)ipong, nihong, sanbong, yonbong, gohong, ropong, nanahong, hacihong, kyuhong, zipong ［MMT］

(31)utux/ipong, sa’ing/nihong, tugan/sanbong, payat/yonbong, gohong, ropong, nanahong, hacihong, kyuhong, zipong ［NFT］

(32)iko, niko, sanko, yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko
［KFS, HFS, SFT, IMT, GMT］

(33)utux/iko, sa'ing/niko, tugan/sanko, payat/yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko ［OMT, BFF］

(34)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko
［AMT, UFT, CMT, EFT, YFF］

(35)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roku, sici/nana, haci, ku, zyu
［LFT］

（30）～（34）に示すように、*kasa*〈傘〉を数える際に、「瓶」と同じように日本語由来の*-hong*を用いるのはMMTとNFTだけで、ほかのインフォーマントは*-hong*を使わない。KFS・HFS・SFT・IMT・GMTは*-ko*を使う。AMT・UFT・CMT・OMT・EFT・BFF・YFFは1～4はアタヤル語由来の本数詞、5以上は「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」を使用する。ただし、OMT・BFFは1～4は*-ko*も併用する。日本語では「傘」は前述の「瓶」と同じく「本」という助数詞を使うが、宜蘭クレオールでは「瓶」と「傘」は異なる助数詞をとっているのである。

なお、LFTは（35）に示すように、前述の機械類と同様に、1～4にはアタヤル語由来の本数詞、5には「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」、6以上には日本語由来の本数詞を使う。

では、「平たい物」について、*lukus*〈服〉の数量を示す場合を見てみよう。

(36)utux/icimay, sa'ing/nimay, tugan/sanmay, payat/yonmay, gomay, rokumay, sicimay/nanamay, hacimay, kyumay, zyumay
［KFS, HFS, SFT, IMT, UFT, OMT, GMT, EFT, LFT］

(37)icimay, nimay, sanmay, yonmay, gomay, rokumay, sicimay/nanamay, hacimay, kyumay, zyumay ［AMT, NFT, MMT, CMT, BFF］

(38)utux, sa'ing, tugan, payat/yonko, goko, roko, siciko, haciko, kyuko, zyuko ［YFF］

（36）のように、二世の KFS・HFS と三世の SFT・IMT・UFT・OMT・GMT・EFT・LFT は 1～4 にはアタヤル語由来の本数詞と「日本語由来の本数詞＋助数詞-*may*」の二系列を、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞-*may*」を使う。三世の AMT・NFT・MMT・CMT と四世の BFF は（37）のように「日本語由来の本数詞＋助数詞-*may*」だけを使う。四世の YFF は、（38）のように 1～3 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞-*ko*」を使い、4 には二系列の併用が観察される。*lukus*〈服〉を数える助数詞は基本的には「枚」由来の-*may* が用いられるが、一部の四世（YFF）には「個」由来の-*ko* が使われるのである。

hong〈本〉を数える場合は次のようになる。

(39)isyacu, nisyacu, sansyacu, yonsyacu, gosyacu, rokusyacu, nanasyacu, hasyacu, kyusyacu, zisyacu ［HFS］

(40)iko, niko, sanko, yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko ［MMT, IMT］

(41)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko ［AMT, CMT, BFF］

(42)utux, sa'ing, tugan, payat/yonko, goko, roko, nanako/sici, haciko/haci, kyuko/kyu, ziko/zyu ［OMT, EFT, YFF］

(43)utux, sa'ing, tugan, payat, goko, roku, sici/nana, haci, ku, zyu ［LFT］

(44)utux, sa'ing, tugan, payat, go, roku, sici/nana, haci, kyu, zyu ［KFS, SFT, NFT, UFT, GMT］

二世の HFS は（39）のように、*hong*〈本〉について、どの数でも日本語「冊」由来の-*syacu* を使うが、三世の MMT・IMT は（40）の

ように日本語「個」由来の*-ko*を用いる。(41) に示すように、AMT・CMT・BFF も 5 以上は*-ko* で、1~4 はアタヤル語由来の本数詞を使う。OMT・EFT・YFF は（42）のように、1～3 にはアタヤル語由来の本数詞を、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」を使い、4 には二系列の併用が観察される。ただし、7 以上には日本語由来の本数詞を使うこともある。LFT は「本」についてもこれまでの数え方のパターン、すなわち、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞を、5 には「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」を、6 以上には日本語由来の本数詞を用いる。

二世の KFS と三世の SFT・NFT・UFT・GMT は（44）のように、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞を、5 以上には日本語由来の本数詞を使う。二世が 5 以上に助数詞を使わず、日本語由来の本数詞のみで数えるのは、この KFS の「本」の例のみである。KFS は、普段の生活においてあまり本を数えることがないため、何と言うかと躊躇していたが、5 以上の数の場合、日本語由来の本数詞で助数詞を付けないのは、アタヤル語の数え方からの類推の結果と考えられる。

mikang〈みかん〉など小物の場合は、次のようになる。

(45)iko, niko, sanko, yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko
［KFS, HFS, SFT, MMT, GMT, LFT］

(46)utux, sa’ing, tugan, payat, goko, roko, siciko/nanako, haciko, kyuko, ziko ［IMT, UFT, CMT, OMT, EFT, BFF, YFF］

(47)utux/iko, sa’ing/niko, tugan/sanko, payat/yonko, goko, roko, nanako, haciko, kyuko, ziko ［AMT, NFT］

（45）～（47）のように、二世の KFS・HFS と三世の SFT・MMT・GMT・LFT は *mikang*〈みかん〉についてどの数でも「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」を使うが、ほかのインフォーマントは、1～4 にはアタヤル由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞*-ko*」を使う。ただし、AMT と NFT は 1～4 に*-ko* も併用する。

5. 世代間変異からみる助数詞の変化

助数詞の表し方について述べてきたが、そこにはさまざまなレベルの変異（バリエーション）が見られた。その多様性の中から変化のプロセスを探るために、変異理論の考え方（Weinreich et al. 1968 など）を参考に、話者間の違いから考察を行う。以下では、変異形の減少と助数詞の体系の単純化に分けて論じる。

5.1. 変異形の減少

日本語の助数詞は形態音韻論的に異形態を持つことがある。例えば、「匹」にはヒキ・ビキ・ピキ、「本」にはホン・ボン・ポンという異形態が存在する。こうした「匹」や「本」の変異形も宜蘭クレオールに取り込まれており、「本」由来の*-hong* は日本語と同じ変異形*-bong*・*-pong* を持つが、「匹」由来の*-hiki* は変異形*-piki* しかなく、変異形が由来言語より少ない。*-hiki* と*-hong* の変異形の使用には世代差が観察されるが、インフォーマントごとにまとめると、表 3 と表 4 のようになる。表では、横軸に数を、縦軸にインフォーマントの略号と生年を記した。

まず、表 3 から、動物を指す*-hiki* とその変異形*-piki* において、二世と年配の三世は *ipki*・*nihiki*・*sanpiki*・*yonpiki*・*gohiki*・*ropiki*・*nanahiki*・*hacihiki/hapiki*・*kyuhiki*・*zipiki* を使うが、若い人ほど*-hiki* の使用が減少し、*-hiki* と*-piki* を一部自由変異として使う人（NFT・IMT・EFT）、ひいては*-piki* に一本化する人（OMT・GMT）までいることがわかる。

表 4 から、*-hong* とその変異形*-bong*・*-pong* においても、二世と年配の三世は *ipong*・*nihong*・*sanbong*・*yonbong*・*gohong*・*ropong*・*nanahong*・*hacihong/hapong*・*kyuhong*・*zipong* を使うが、若い人ほど*-hong* と*-bong* の使用が減少し、*-hong* と*-bong*・*-pong* を一部自由変異として使う人（NFT・OMT・EFT・LFT・BFF・YFF）、ひいては*-pong* に一本化する人（GMT）までいることが読み取れる。

表 3　*-hiki* の変異形の使用

インフォーマント・生年 ＼ 数詞		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
KFS	1934	p	h	p	p	h	p	h	h(p)	h	p
HFS	1939	p	h	p	p	h	p	h	h	h	p
SFT	1947	p	h	p	p	h	p	h	p	h	p
AMT	1951	p	h	p	p	h	p	h	p	h	p
NFT	1955	p	h	p	h/p	h	p	h/p	p	h	p
MMT	1955	p	h	p	p	h	p	h	p	h	p
IMT	1957	×	×	×	×	h/p	p	h/p	p	h	p
UFT	1958	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
CMT	1959	p	h	p	p	h	p	h	p	h	p
OMT	1964	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
GMT	1964	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
EFT	1964	p	h/p	h/p	h/p	h/p	h/p	h/p	h/p	h/p	h/p
LFT	1966	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
BFF	1968	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
YFF	1974	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

※hはhiki、pはpikiを表す。/は併用すること、×はいずれも使用しないこと、h(p)はhacihiki/hapikiのように本数詞によって変わることを示す。

表 4　*-hong* の変異形の使用

インフォーマント・生年 ＼ 数詞		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
KFS	1934	p	h	b	b	h	p	h	h	h	p
HFS	1939	p	h	b	b	h	p	h	h	h	p
SFT	1947	p	h	b	b	h	p	h	p	h	p
AMT	1951	p	h	b	b	h	p	h	p	h	p
NFT	1955	p	h	b	b	h	h(p)	h	h(p)	h/p	p
MMT	1955	p	h	b	b	h	p	h	h	h	p
IMT	1957	p	h	b	b	h	h	h	h	h	p
UFT	1958	p	h	b	b	h	h(p)	h	h	h	p
CMT	1959	p	h	b	b	h	p	h	h(p)	h	p
OMT	1964	p	h/p	h/b	h/b	h/p	h(p)	h	h	p	p
GMT	1964	p	p	p	p	p	p	p	p	p	p
EFT	1964	p	h	b	h/b	h	p	h	p	h	p
LFT	1966	p	h	b	b	h/b/p	×	×	×	×	×
BFF	1968	p	h/p	b/p	b/p	h/b/p	p	h/p	h/p	h/p	h/p
YFF	1974	p	h/p	b	b	×	×	×	×	×	×

※hはhong、bはbong、pはpongを表す。/は併用すること、×はいずれも使用しないこと、h(p)はrokuhong/ropongのように本数詞によって変わることを示す。

以上から、変異形の数の減少のプロセスは

複数の変異形→ 自由変異→ 変異形の一本化

と考えられる。変異形の数の減少は、記憶の負担を軽減する結果と考えられるが、*-piki* と *-pong* といういずれも *p* で始まる異形態に収斂していくのは興味深い現象である。*-piki* と *-pong* はいずれも「いち」と結合する際の異形態で、小さい数の「いち」は日常生活において使用頻度が高いものであるために、覚えやすい発音となったのではないかと推測される。

5.2. 助数詞の体系の単純化

次に、宜蘭クレオールでは、若くなるほど助数詞の数が少なく、助数詞の体系がシンプルなものになっていることを指摘する。図 2 に二世と年配の三世 SFT・AMT・NFT の助数詞、図 3 に年配者（SFT・AMT・NFT）を除く三世の助数詞、図 4 に四世の助数詞を示す。

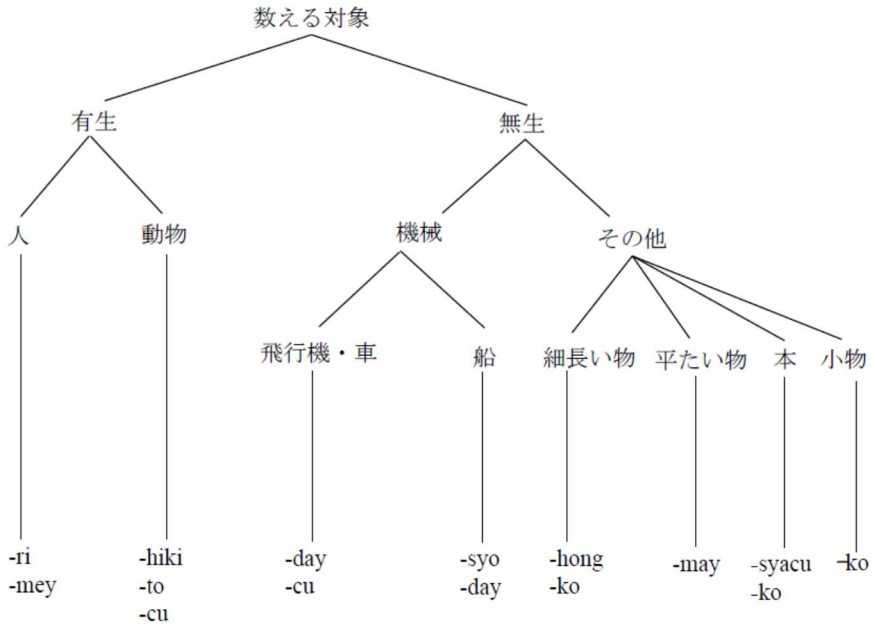


図 2　二世と年配の三世（年配者）の助数詞

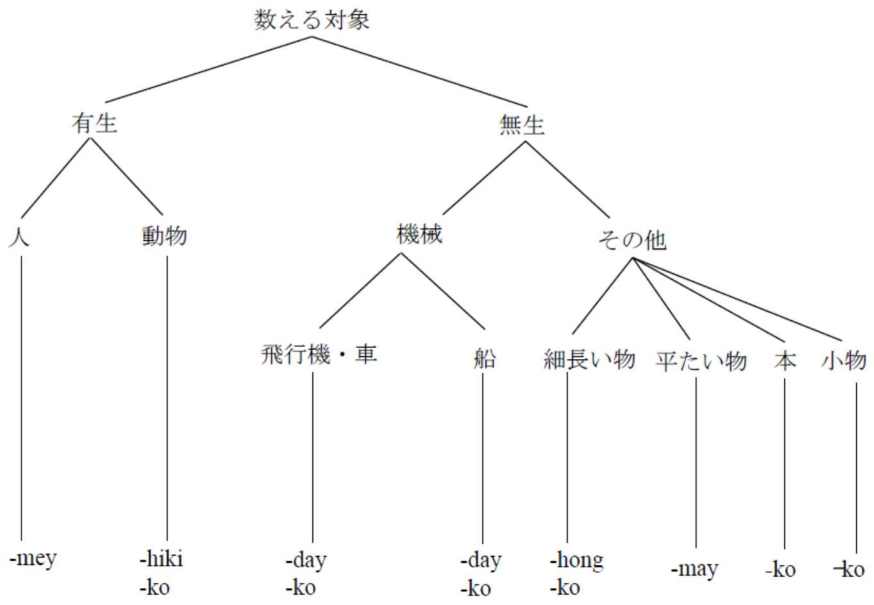


図 3　年配者を除く三世の助数詞

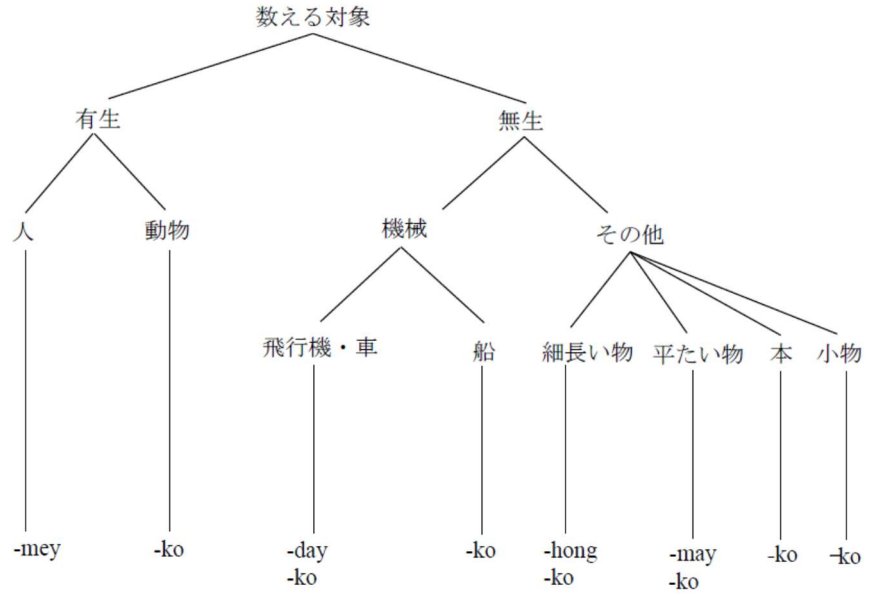


図 4　四世の助数詞

前掲の図 1 と図 2 を見比べると、二世の助数詞は日本語の助数詞より数が少ないことがわかる。二世と年配の三世において、「人」を表す助数詞の数が日本語より少ないことや「動物」の下位区分がないこと、「機械」の下位分類がより単純なものになっていることなどが関わっているのである。

さらに、図 2 と図 3 を比較すると、年配者を除く三世の助数詞は二世と年配の三世より少なくなっており、図 3 と図 4 の比較によって、四世の助数詞は年配者を除く三世より少なくなっていることが読み取れる。世代間で、助数詞のバリエーションが減少しているのである。例えば、図 2 では「人」を表すのに*-ri* と*-mey* が使われるが、図 3 と図 4 ではそれが*-mey* だけになる。また、図 2 では「動物」を表すのに*-hiki* と*-to* と*-cu* が使われるが、図 3 ではそれが*-hiki* と*-ko*、図 4 では*-ko* だけになる。

図 2 は図 1 より、図 3 は図 2 より、そして、図 4 は図 3 より*-ko* の使用が多いのが特徴の一つとして挙げられる。そこで、日本語の「個」と宜蘭クレオールの*-ko* の意味範囲を比べてみることにする。図 1 と図 2～図 4 における「個」「*-ko*」の使用をまとめると、表 5 のようになる。

表 5 からは、日本語では「個」は「小物」の数量を表す助数詞であるが、宜蘭クレオールでは*-ko* は「小物」に限られないことがわかる。

二世と年配の三世では「小物」のほかに「本」「細長い物」も*-ko* が使え、年配者を除く三世では「小物」「本」「細長い物」のほかに、「船」「飛行機・車」、そして「動物」まで使える。それが四世になると、さらに「平たい物」までに意味範囲が広がっていくのである。

表 5 「個」「*-ko*」の意味範囲

日本語	宜蘭クレオール		
	二世と年配の三世	年配者を除く三世	四世
小物	小物 本 細長い物	小物 本 細長い物 船 飛行機・車 動物	小物 本 細長い物 船 飛行機・車 動物 平たい物

宜蘭クレオールにおける*-ko* の意味拡大は、傍層言語の華語による影響ではないかとの意見もあろう。しかし、華語が得意でない二世でも、例えば *kasa*〈傘〉に*-ko* を用いることから、華語による影響説は成り立たなくなる。

現代日本語でも近年、「飛行機 3 個」のように、「個」が意味範囲を広げつつあるようである。荻野（1990：74）では、「現代の若者は、助数詞を単純化し、何にでも『個』や『つ』を使ってすます傾向がうかがえる」として、「個」の汎用性を指摘している。宜蘭クレオールにおける*-ko* の意味拡大は、現代の日本語で起きている変化と共通しているのである。

6. まとめと今後の課題

以上、東岳村で使われている宜蘭クレオールの数詞を取り上げ、考察を行った。その結果、次の点が明らかになった。

まず、日本語由来の本数詞とアタヤル語由来の本数詞が取り込まれているが、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には日本語由来の本数詞が使われるという傾向が見られる。

次に、日本語由来の助数詞が多く使用されているが、数える対象の分類や助数詞の意味用法は日本語と異なるものになっており、世代間変異も存在する。また、1～4 にはアタヤル語由来の本数詞、5 以上には「日本語由来の本数詞＋助数詞」という使用のパターンが見られる。なお、5 以上には、助数詞を使用せずに、日本語由来の本数詞のみの使用も観察されるが、それはアタヤル語由来の本数詞の置き換えで、基層言語からの影響である。

そして、世代間変異から、助数詞の変異形は複数の変異形→自由変異→変異形の一本化というプロセスで減少していることを突き止めることができた。また、若い世代ほど助数詞*-ko* が使用範囲を広げ、ほかの助数詞に取って代わりつつあることも明らかになった。

本稿の冒頭で述べたように、これまで、世界のピジン・クレオールを中心とした接触言語の中に、助数詞の使用が報告されたのは、Ambon Malay、Chinese Pidgin English、Sri Lanka Portuguese、Gullah の 4 言語のみである。Gullah は確かではないが、ほかの 3 言語における助数詞の使用は基層言語による影響の結果と言われている（Maurer et al. 2013）。宜蘭クレオールは上層言語由来の助数詞を多く取り入れているという点で、これらのクレオールと異なる。また、1～4 には基層言語の本数詞を用い、5 以上には上層言語の本数詞または助数詞を加えて使うというパターンは、宜蘭クレオールの特徴と言える。

なお、日本語もかつて漢語と接触した際に、助数詞体系に類似した現象が生じた。例えば、「ひと箱」「ふた箱」「み箱」「よ箱/よん箱」「ゴ箱」「ロク箱」や「ひと袋」「ふた袋」「み袋」「よ袋/よん袋」「ゴ袋/いつ袋」「ロク袋」のように、1～4 には固有の和語系本数詞が、5 以上には外来の漢語系本数詞が使われている（NHK 放送文化研究所 2005）。言語が接触した際の「数」の変化において、小さい数に「基層」となる言語の形式が残りやすいのではないかとも考えられるが、その追究は今後の課題である。

謝辞

本稿は国際都市言語学会第 16 回研究大会（大分大学、2018 年 9 月 10 日-13 日）での研究発表に基づいて修正・加筆したものである。発表時には、井上史雄先生、日高貢一郎先生、友定賢治先生をはじめ、多くの先生方より貴重なコメントを賜った。また、本稿の作成に当たっては、真田信治先生及び佐竹久仁子先生からは御助言を、査読者の方々からは有益なコメントをいただいた。本稿で用いるデータの一部は、台湾科技部の研究プロジェクト『宜蘭縣日語克里奥爾之語氣系統』（課題番号：MOST106-2410-H-259-021）での調査によって得られたものである。インフォーマントをはじめ、多くの方々に協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

参考文献

江明清・莊仁實・呉元和・曹天瑞（編著）（2009）『宜蘭澤敖利泰雅族語言圖解式小辭典』、宜蘭：宜蘭縣政府

安部清哉・土田滋・新居田純野（2008）「アタヤル語（泰雅語）の寒渓方言に入った日本語―台湾原住民語言能力試験問題における―」『東洋文化研究』10: 696–730

NHK 放送文化研究所(2005)『NHK ことばのハンドブック 第 2 版』、東京：NHK 出版

荻野綱男（1990）「現代日本語の助数詞の意味変化の方向」『文藝言語研究 言語篇』17：67–77

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典第 6 巻術語篇』、東京：三省堂

簡月真・真田信治（2010）「東台灣泰雅族的宜蘭克里奥爾」『台灣原住民族研究季刊』3（3）：75–89

簡月真・真田信治（2011）「台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞―『ナイ』と『ン』の変容をめぐって―」『言語研究』140：73–87

簡月真（2018a）「宜蘭クレオールの語彙の様相―東岳村の場合―」『*Language and Linguistics in Oceania*』10: 67–87

簡月真(2018b)「日本語を上層とする宜蘭クレオールの人称代名詞」『日本語の研究』14（4）：31–47

佐藤喜代治（編）（1992）『国語学研究事典 8 版』、東京：明治書院

真田信治（2015）「宜蘭クレオールの『衣・食・住』語彙について」『語彙研究』12：9–16

真田信治・簡月真（2007）「台湾アタヤル族における日本語クレオール」日本語学会 2007 年春季大会口頭発表、関西大学、5 月 27 日

真田信治・簡月真（2008）「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4（2）：69–76

臺灣總督府警務局(1938)『高砂族調査書―第五編 蕃社概況 迷信―』、臺北：臺灣總督府警務局

臺灣總督府警務局（1944)『高砂族の教育』、臺北：臺灣總督府警務局

田中春美・樋口時弘・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・下宮忠雄・田中幸子 （編）（1988）『現代言語学辞典』、東京：成美堂

土田滋（2008）「日本語ベースのクリオール―アタヤル語寒渓方言―」『台湾原住民研究』12：159–172

水口志乃扶（2004）「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対照』61–77、東京：くろしお出版

日本語教育学会（編）（2005）『新版日本語教育事典』、東京：大修館

Chien, Yuehchen（2015）The lexical system of Yilan Creole. In: Elizabeth Zeitoun, Stacy F. Teng and Joy J. Wu（eds.）*New Advances in Formosan Linguistics*, 513–532. Canberra: Asia-Pacific Linguistic.

Chien, Yuehchen（2016）「Yilan Creole case marking」『国立国語研究所論集』10：1–17.

Chien, Yuehchen and Shinji Sanada （2010）Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25（2）：350–357.

Iwasaki, Shoichi（2013）*Japanese*（Revised edition）. Amsterdam: John Benjamins.

Kouwenberg, Silvia and John Victor Singler （2008）Introduction. In: Silvia Kouwenberg and John Victor Singler（eds.）*The Handbook of Pidgin and Creole Studies*. 1–16. UK: Wiley-Blackwell.

Maurer, Philippe and the APiCS Consortium（2013）Sortal numeral classifiers. In Susanne Maria Michaelis, Philippe Maurer, Martin Haspelmath, and Magnus Huber（eds.）*The Atlas of Pidgin and Creole Language Structures*, 138–139. Oxford: Oxford University Press.

Rau, Der-Hwa Victoria（1992）*A Grammar of Atayal*. Taipei: The Crane Publishing Co.

Weinreich, U., W. Labov and M. Herzog （1968） Empirical foundations for a theory of language change, In Lehmann, W. P. and Y. Malkiel（eds.）*Directions for Historical Linguistics*, 95–188, Austin, TZ: University of Texas Press.